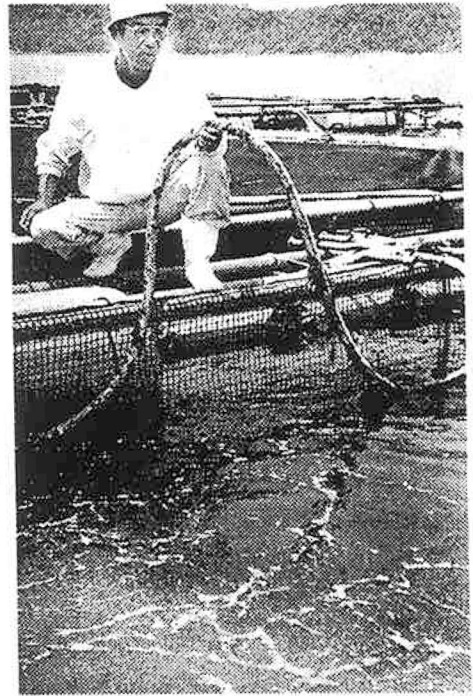


フグ養殖にオゾン発生装置

海洋いけす転用は国内初——熊本県



気泡が上がるいけすでフグの成長具合を見る森さん
—熊本県天草郡竜ヶ岳町大道沖で

生存率に成果

熊本県天草郡竜ヶ岳町大道の養殖業森利隆さんが、フグの養殖に、オゾン発生装置を導入し、成果を上げている。長野市の有限会社「ナガノバイオ」(中島光晴社長、資本金千万円)が淡水養殖用に開発した装置で、海洋いけすへの転用は国内で初めてという。

オゾン発生装置は、金魚や熱帯魚水槽で見られる気泡発生装置を大掛かりにしたような仕組み。大道地区の入り江にある約三十基の森さんのいけすのうち、フグ用の六基に今年五月に約四百八十万円かけて設置した。

十畳四方、深さ七メートルのいけすの底から二メートルとろろに長さ十センチ、直径二・五センチのパイプを二メートル間隔で設置。合成ゴム製のパイプには、直径千分の一ミリの細かな穴が無数にあいている。オ

ゾンは約二百メートル離れた岸辺のポンプ室から、圧縮空気とともに送られてくる。

取り付け後のフグの生存率は九〇%。現在、約一万匹が順調に育っている。養殖ハマチに大きな被害が出た七月の赤潮発生時にも、えさの食いは落ちず、ほとんど死ななかった。

森さんは三年前にもフグの養殖を手掛けたが、夏場の水温の上昇に伴って病原菌が繁殖し、約二万匹を死なせたことがある。

「ナガノバイオ」が装置を開発したのは八年前。これまで主に東北や北海道地区のニジマス、アユ、ヤマメなど淡水養殖に活用されてきた。三年前から台湾、韓国のエビ、ハマチ養殖業者にも輸出している。オゾンは、細菌やカビを分解する強い殺菌効果があるため赤潮にも強

いという。
森さんは「フグは外洋で育つため、潮の流れの少ない八代海での飼育は難しいが、気泡のカーテンがいけす内に水流を起しているのも良い結果につながっているのではないか」といっている。

熊本県水産研究センターの南部豊揮養殖部長は「オゾン装置は興味深い。今後、どんな魚種にとれくらいの濃度のオゾンが効くかなど基本的な部分を調べていきたい」と話している。

